

アメリカ・フレンズ奉仕団の 日系アメリカ人再定住支援

— ホステル運営を中心に —

増 田 直 子

はじめに

現地時間 1941 年 12 月 7 日にハワイの真珠湾が攻撃されて太平洋戦争が勃発したことで、翌年 2 月に西海岸に住む日本人移民およびその子孫である日系アメリカ人(以下日系人)の強制立ち退きおよび収容が始まった。強制立ち退きが行われた当初、「全米黒人地位向上協会(National Association for Achievement of Colored People)」、「全国都市同盟(National Urban League)」、「全米黒人女性評議会(National Council of Negro Women)」、「アメリカユダヤ人委員会(American Jewish Committee)」、「名誉毀損防止同盟(Anti-Defamation League)」などのアフリカ系やユダヤ系の主な組織は積極的に反対の立場を表明せず、人種に基づいた問題だと十分に認識さえしていなかった。アメリカ最大の人権擁護組織である「アメリカ自由人権協会(American Civil Liberties Union 以下 ACLU)」の理事会でさえ収容政策を支持した¹。他方、多くのキリスト教教会の反応は日系人を援助しようとする勇気ある同情的な行いと立ち退きの必要性を受け入れる態度が共存していたとテイラーは指摘している。日系人に対して親身になり、特に日系人信徒を援助したが、政府の政策についてはほとんど何の反対も示さなかった。当時の宗教界自体が日系人に対して偏見を持っており、多くの牧師や教会員たちは反日的な噂を信じていた²。

多くの組織が日系人の立ち退き・収容に対して沈黙を守る中でクエーカー

教徒（正式名称はフレンド派、教会名はキリスト友会）は、いちはやく立ち退きに反対をし、個人としてもアメリカ・フレンズ奉仕団（American Friends Service Committee 以下 AFSC）としても日系人を積極的に支援した。AFSC は 1917 年にフィラデルフィアで第 1 次世界大戦の良心的懲役拒否者を支援するために創設されたクエーカー教徒の社会奉仕団体であり、第 2 次世界大戦前までの 1930 年代にはヨーロッパの難民問題やアメリカの人種問題改善に注力していた。オースティンによると、AFSC は戦時の日系人の困難な状況に対応するため、1930 年代末のヨーロッパからの難民支援の手法を活用すると同時に、人種問題への新しい取り組みを行い、理解を得た。ブランケンシップは 1940 年代は人種関係の転換期で、教会が社会正義のための運動に関わりだした時期だったと指摘している³。

AFSC は西海岸の大学で学ぶ学生を中西部や東部の大学に転入させる仕事に率先して関わり、1942 年 5 月に創設された「全米日系アメリカ人学生転住委員会（National Japanese American Student Relocation Council）」で中心的役割を果たしたことはオキヒロやオースティンによって明らかにされている⁴。しかし、日系人たちの収容所からの出所を促すために AFSC が最初にホステルを作り、その手法が他のキリスト教諸宗派に共有され、再定住を手助けしたことについてはあまり注目されていない。本稿ではホステル運営を通しての AFSC の再定住支援がどのようなものであったかを明らかにし、AFSC の支援が再定住政策においてどのような意味をもったのかを検討する。

1. 日系アメリカ人の立ち退き・収容当初の AFSC の対応

クエーカー教徒は太平洋戦争が始まる前から日系人への差別や権利侵害への脅威が差し迫っていることを認識していた。1941 年春にフロイド・シュモーは日系人が直面している困難に注目を集めるためにシアトル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ホノルルで会議を組織した。真珠湾攻撃が起こるとすぐに AFSC は日系人の公民権を守るために動き出し、シュモーを雇ってシアトルで新しい支部を率いさせた。排日の動きが強まる中で AFSC は ACLU や「日本人を祖先に持つ市民や外国人のための北カリフォルニアフェアプレイ委員会（Northern California Committee on Fair Play for Citizens and Aliens of Japanese Ancestry）」とともに日系人の権利の擁護を訴えた⁵。

しかし、日系人への敵意が強まる中でその声はかき消された。西部防衛司令部長官ジョン・L・デウィットは全日系人の立ち退きを主張し、1942 年 2

月19日にルーズベルト大統領は大統領行政命令第9066号に署名をした。これを受けて、1942年3月に陸軍はカリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州全域およびアリゾナ州の南半分を軍事指定地域とし、そこに居住する日系人の立ち退きを命令した。

1942年2月25日に海軍による最初の立ち退きが行われた。カリフォルニア州サンペドロ湾にあるターミナル島に住む日系人に48時間以内の立ち退きが通達された。彼らはこの時点では収容所に収容されなかったが、本土に住む場所を探さなければならなかった。AFSCパサデナ支部のエスター・ローズやハーバートとマデリン・ニコルソン夫妻は他の教会関係者とともに行き場のない人々を支援した⁶。

AFSCパサデナ支部は突然の立ち退き命令を予測して、ホステルの準備とターミナル島の日系人家族のデータを集めていた。ローズはAFSC本部に個人や家族のための家と集団を収容できる建物を見つける手助けをしていることを報告した。大統領行政命令第9066号が出される4日前の1942年2月15日にAFSCは光熱費、使用期間に建物に生じる費用、税金と保険を払うことで長老派の建物を日系人の収容のために使用するという同意を得た。また、パサデナ支部が行った事前調査によるとターミナル島の約300人の行き先がないことがわかり、そのうちバプティスト国内伝道団と関係のある約150人はニコルソンの援助でバプティストが世話する語学学校へ、残り約150人はAFSCが見つけた4つのホステルに、そして少数がロサンゼルス市の教会の寺に行くこととなった。そのため、立ち退き命令が出た時には、ホステルや移動のためのトラックと運転手の準備は出来ていた。立ち退き当日にもAFSCのボランティアたちは行き場のない人々にどう対処するかを考えるためにアンケートを配った。ロサンゼルス市のボイルハイツにある長老派の国内伝道団から借り受けた寮を使用したフォーサイス・ホステルは、ボランティアたちによって既に掃除されていた。立ち退き直後にはフォーサイス・ホステルには73人が、元語学学校だったノウォーク・ホステルには10家族42人が、ブルー・ヒルズ・ホステルにはフレンズ派の牧師キヨシ・イシカワをリーダーとする8家族25人が、エル・モンテのホステルには1家族が収容された⁷。

フォーサイス・ホステルには専属のスタッフがおらず、人々が協力して運営した。最初の数日間ロサンゼルス市の日系人教会から食事の差し入れがされた。キルトや衣類がフレンド派の教会から寄付された。昼食や夕食は協力して調理し、多くの家族が食料品を持参しており、それらは共通の必需品として使われた。AFSCのメンバーが交代でホステルに滞在したり、訪れたり

した。ローズは日本での伝道の経験があり、日本語が話せたので、一世との意思疎通に役立った。3月24日に出された夜間外出禁止令と居住地から5マイル内の移動制限のため、AFSCは食料品などの必需品の買い物を彼らのために行った。ホステルでは娯楽も提供され、ホーム・ムービーが上映されたり、お菓子作りの集いが催されたり、ゲームや軽食の夕べのために様々な教会から人が集まったりした。大人1人あたり1週間に約1ドル50セントの費用がかかったが、政府からの援助は最低限のものであった。ホステル滞在者は12歳以上1人につき週50セント払うことに同意した⁸。

フォーサイス・ホステル開業中のピーク時には93人が滞在した。ターミナル島から立ち退きした人の中にはお金がつかたり、自分で手配した滞在先に不満でホステルに途中から滞在する人がいた。他方、1942年3月27日まででは軍が勧める軍事指定地域外への「自由移動」の期間であったため、ホステルから出て行く人が数人いた。また、マンザナーでの雇用に約半数が応募して4月4日に出て行き、残りの約50人が滞在していた⁹。

1942年4月になると強制立ち退きが本格化し、ブルー・ヒルズ・ホステルは4月4日に閉鎖した。4月13日にはノウォーク・ホステルから14家族がサンタ・アニタ仮収容所(カリフォルニア州)に出発した。5月22日にはフォーサイス・ホステルのあるロサンゼルス市ボイルハイツ周辺でも立ち退き掲示が出され、5月29日に最後の家族が出て行った。2月26日から5月29日までフォーサイス・ホステルには延べ119人が滞在した。ホステルに滞在した日系人の多くは老人か幼い子どものいる家族だった。彼らの多くは西海岸からの立ち退きが行われるまで、ホステルに滞在した¹⁰。

AFSCのパサデナ支部をはじめとする西海岸の支部は積極的に日系人を支援した¹¹。パサデナ支部では立ち退きを行う責任者たちに、できるだけ家族やコミュニティを一緒にすること、彼らの立ち退きや再定住の費用を軽減すること、資産の保管者の任命、高齢者、病人、妊婦の立ち退きの免除や延長を認めること、大学生や大学院生が勉学を続けられるように手配すること、立ち退きを再定住に転換することを提案した。AFSCは他の宗派と協力して、日系人家族を家から収容所まで車で送り届け、温かいパンやコーヒー、オレンジ・ジュースや牛乳の朝食を出す手助けをした。5月15日に約300人がバスでサンタ・アニタ仮収容所に行く際にも、食べ物や交通手段を提供した。シアトルでは1942年3月2日にピュアラップ仮収容所(ワシントン州)に向かうため指定された場所に集まった日系人にシュモーやAFSCのメンバーが仮設食堂を出してコーヒーや菓子パンを出した。彼らの行いは多くの日系人

たちの記憶に残った。チアキ・クズハラ牧師は、軍の列車に乗ると、各座席の上にクエーカー教徒が用意したパンと飲み物があつたことを記憶している。西海岸での立ち退きが始まり、仮収容所に次々と日系人が収容されるとAFSCは彼らのもとを訪れ始めた¹²。

AFSCは強制立ち退きに対する人道的な解決法を模索した。日系人の問題を西海岸の支部だけで対処するのは難しいと考えたパサデナ支部は本部からの支援や助言を必要としていた。パサデナ支部は西海岸の日系人の状況を知ってもらい、AFSC全体で日系人の問題に取り組めるように、本部フィラデルフィアにいるホーマー・モリスに視察に来るよう要望を出し、モリスは数ヵ月間西海岸に滞在することになった。収容所を訪れたモリスは収容所のプライバシーの欠如や世代間の対立、日系人の疎外感を心配した。そして、AFSCがするべき仕事としてかつて日本で伝道団の一員として働き、日本語を話せるローズやニコルソンのようなメンバーの活躍を期待し、西海岸の支部3つに担当の収容所を割り当て、収容所訪問を促した。また、学生転住や収容所から出所できるように仕事の斡旋などを提言した。AFSCはフィラデルフィアを中心に活動してきたが、日系人の問題が西海岸で起こったことから管理の分散化を提言した¹³。

AFSCは立ち退きの対応策として日系人の再定住を重要なものと位置づけ、「戦時転住局 (War Relocation Authority 以下 WRA)」と会合を開き、日系人の再定住計画に関わっていった。WRAの設立目的が収容所の管理と日系人を収容所から軍事指定地域外に出所させ、通常の生活に戻すことであったため、再定住計画はWRAの主要な仕事であった。「指示された国家の安全と行政上の便宜の制限内で」WRAは「収容所の人数の減少と収容者の内陸部への拡散」を目指した。1942年7月にWRAは軍事指定地域外への再定住計画を発表した。収容所の外での就職先や進学先が決まった者の出所を許可するという「無期出所許可」の規定を発表した。しかし、出所の規定が厳しかったため、出所者の率は収容者百人つき一人以下だった。そこで、1942年10月1日から規定を緩和し、短期の出所や労働集団の出所も認め、二世だけでなく一世も出所の対象とした。再定住先の地元の組織や教会組織とのネットワークを作り、日系人が円滑に受け入れられるように協力を要請した。WRAはAFSCが他の教会組織と連携して日系人の再定住先で広報活動をすることを期待した¹⁴。

AFSCは日系人再定住のための組織作りを始めた。7月28日にシカゴで日系人支援に関心のある組織や個人を調整し、情報を共有し、可能であれ

ば情報センターを設置し、広報活動することを目的とする諮問委員会が創設された。会議にはAFSCをはじめとし、「バプティスト女性国内伝道団 (Baptist Woman's Home Missionary Society)」、「シカゴ教会連合 (Chicago Church Federation)」、「ハル・ハウス (Hull House)」、YWCA など12の組織が参加した。そして、AFSCが日系人への十分なサービスを計画することとなった。8月にはAFSC中西部支部のオフィスが創設された。日系人を収容所から出所させるため、AFSCは職の斡旋や再定住先の広報活動や受け入れ支援体制作りを始めた。10月にニューヨークで「教会会議連合 (Federal Council of Church)」と「国内伝道会議 (Home Mission Council)」が協力して「日系アメリカ人再定住委員会 (Committee on Resettlement of Japanese Americans)」を結成すると、その事務局長のジョージ・ランドクイストがクエーカー教徒であり、AFSCニューヨーク支部に在籍していたこともあり、AFSCと連携するようになった。ランドクイストは中西部の都市を回り、各都市で再定住委員会の結成を援助した。地元の市民リーダーや教会組織が再定住委員会に積極的に関わっていった。WRAが中西部に現地事務所を開設する前からAFSCを含む複数の教会組織がシカゴ、ミネアポリス、クリーブランド、マディソンなどに委員会を結成した¹⁵。

AFSCシカゴ支部は日系人の職の斡旋に注力したが、そのためのオフィスを設置する資金が諮問委員会にはなく、人手も足りなかった。また、WRAは仕事を確保した日系人に出所許可を与え、AFSCに再定住支援を求めたが、委員会内部には政府が日系人を収容しているのだから、彼らを再定住させるのは政府の役割であるという意見があった。そのため、WRAにシカゴにオフィスを設置するよう要請する動議を可決した。1942年には再定住があまり進まず、2200の出所許可申請がされたが、250の無期出所申請しか認められず、866人しか出所しなかった¹⁶。

西海岸からの日系人立ち退きに反対し、それを阻止できなかったAFSCは日系人の再定住計画に重きを置いた。西海岸支部からの要請や情報提供によってAFSC本部にも日系人の問題が特定の地域の問題ではなく国の問題であるという認識が共有されるようになった。1942年は主に再定住のための組織を作り、収容所で日系人の情報を集め、彼らが出所できるように職探しを行った。しかし、職探しの中心となっていたシカゴ支部から日系人の収容所からの出所が思わしくないという意見が出て、AFSCは更なる計画を考えなければならなかった。

2. 中西部でのホステル開設

2-1 ホステル開設

AFSCは政府の官僚主義によって出所許可書が出るのが遅く、せっかく収容所の外に仕事を得ても時間差が生じることで再定住を希望する日系人がためらいを覚えることが問題だと考えていた。また、1942年12月にマンザナー収容所(カリフォルニア州)で起こった暴動の影響も懸念した。WRAも方針転換の必要性に迫られ、1942年にはAFSCをはじめとする民間組織に任せていた職の斡旋をWRA自身が行うことになった。1943年1月4日に中西部最初のWRA現地事務所がシカゴに開設されたのを皮切りに、デンバー、ソルトレーク・シティ、クリーブランド、ミネアポリスに現地事務所が開設された。現地事務所の主な役割は地元日系人やWRAの情報を提供し、日系人への仕事を引き出し、求人情報や地元の日系人に対する態度に関する情報を収容所に送ること、地元再定住委員会結成を促し、AFSCなど既存の日系人支援組織と協力することだった。特に、WRAは日系人の再定住先である都市で好意的な受け入れ状況を作ることを重視し、AFSCをはじめとする支援組織にその役割を果たすことを期待した¹⁷。

収容所からの出所を早めるために1942年12月にAFSCとプレスレン教会の代表がWRAと協議し、日系人が再定住し、住居や職を探せるようにホステルを再定住先に建設することを提案した。収容所から出所許可を得るには、住宅や職が確保されていなければならなかったが、収容所にいる日系人にとってこれらを探すことが難しかった。そのため、AFSCの提案したホステルでの短期滞在は日系人の再定住に非常に有効であった。さらには、AFSCは1930年代末にナチス政権下から逃れてきたヨーロッパからの難民を受け入れるホステルをアイオワ州スカターグッドで運営した経験があり、自信となっていた。こうした要請を受けてWRA長官ディロン・マイヤーは職探しの間に滞在できるホステルをAFSCが設立することを条件に出所前に職を確保していなくても出所許可書を出すことを認めた¹⁸。

ホステル設立許可が出たことで急遽ホステル開設の準備が始められた。モリスはマンザナー暴動の際に当局の協力者と見なされ、命の危険があったためマンザナー収容所からデス・バレーにある市民保全部隊(Civilian Conservation Corps)のキャンプに移されたグループをまずシカゴのホステルに迎え入れたいと考えていた。パサデナ支部のデビット・ヘンリーとローズがデス・バレーを訪れてインタビューを行い、シカゴでは彼らを受け入れる

ための建物探しが行われた。その際にモリスは受入れ人数を12人から15人と少なめのホステルにするように提案した。日系人を1カ所に固まらせず、拡散させるというWRAの再定住政策に従い、「宣伝活動上の問題を作りだす」ことがないように大人数の日系人をホステルに受け入れないようにしようという意図があった。1つの収容所から日系人を受け入れると、「くっつき」たがるので、複数の収容所から数人ずつホステルに受け入れることも提案された。AFSCはホステルの開設は重要なので「最初の1歩を非常に慎重に行わなければならない」と考えていた。そのため、ブレスレン奉仕団 (Brethren Service Committee) との協力関係も念頭においていた¹⁹。

AFSCはデス・バレーにいる日系人のグループをまずホステルに受け入れるというプレッシャーを感じている中で、デス・バレーを訪れていたローズから日系人をAFSCのスタッフに雇う提案がなされた。彼らを雇うことは「日系人の気持ちを解釈し、彼らの仕事を探すのに並外れた助け」となるだろうとしている。その1例がトーゴ・タナカである。タナカは、戦前は『羅府新報』の記者であり、マンザナー収容所では学生の再定住を手伝っていた。1942年12月に起きたマンザナー暴動で標的の1人とされたことから収容所を出て、デス・バレーに逃れ、カリフォルニア大学パークレー校の「日系アメリカ人立ち退き再定住研究 (Japanese American Evacuation and Resettlement Study)」に携わるようになった。戦前に仕事で知り合ったローズにリクルートされたタナカはAFSCシカゴ支部でスタッフとして再定住してきた日系人と面談をし、職探しや家探しを手伝った。これ以降、出所許可が出るようにAFSCは日系人をスタッフとして雇うことがあった²⁰。

AFSCは1943年2月1日にシカゴにホステルを開設し、2月18日に大人10人、子ども4人が到着した。ホステル滞在者は部屋代と食費に1日1ドル、10歳以下の子どもは50セント払った。仕事を確保している場合は、1週間に12ドル、子どもは6ドルだった。ホステルでは料理人と栄養士が必要なため、収容所から日系人を雇った。1か月後にブレスレン奉仕団の援助によってマンザナー収容所で教師をしていたラルフとメアリー・スメルツァーもシカゴでホステルを開いた²¹。

AFSCはシカゴ以外の場所にもホステルを計画し始めた。その1つが1930年代末にナチス政権から逃れてきた人々を受け入れるために使っていたアイオワ州スカターグッドのホステルを日系人向けに転用するというものだった。アイオワのAFSCメンバーからまず少数の日系人を短期で受け入れ、地元の反応をみてはどうかという提案がなされた。また、スカターグッドのホ

ステルを職探しの前や職探しの間のための滞在先か一時的な仕事や日雇い労働のための滞在先として使用してはどうかという提案がなされた。AFSC本部にいたモリスは陸軍が1943年1月に日系人志願兵の受け入れを認めたことにより日系人の忠誠心に対する世論の疑いが晴れることや、農業労働者が不足していることからアイオワに日系人のためのホステルを作ることへの地元の反対はそれほど大きくないだろうと考えていた²²。

しかし、アイオワ西部支部で集会を開くと日系人受け入れに反対の声があがった。その理由としては「我々の息子たちが自由のために戦っている時に日系人を地域に受け入れるという計画を彼らは認めないだろう」というものだった。モリスはこうした反対意見に対し、職員を派遣して公の場で話しをしてもらえるようにWRAに手配を頼んだ。AFSCは政府機関からのお墨付きを得た形でホステルを開くことを地域住民に知らせようとした。会合にはアメリカ在郷軍人会のメンバーがやって来て、日系人を受け入れるとアイオワ西部支部が「困ったことになる」と脅し、その対処もWRAに頼まなければならなかった。会合では戦争が終わって「息子たちが戻ってくると仕事が「安い労働力」に取られていることになる」という意見もでた²³。

WRA職員が出席した会合の結果、スカターグッドでホステルの計画を進めるのは賢明ではないという提言をAFSCは受けた。代わりにアイオワ州デモインでホステル開業案が浮上した。この提言についてAFSC内で全員が一致して受け入れたわけではなく、計画を一次中断するくらいにしたらどうかという意見もあった。アイオワ西部支部によるとホステルに反対を唱えている人たちは多数派ではないが、彼らは「声が大きく(outspoken)」、「卑劣で」、「感情的な側面から論じて」いた。そして、反対派に「クエーカーをとめてやったぞと言う機会を与え」ず、「地元のフレンド派に対していい気味だ」と思わせないように、AFSCが反対派の声に負けてスカターグッドのホステル計画を中止したのではなく、WRAから正式に計画中止の発表があったようにしたいという手紙がモリスに出された。これに関してモリスはWRAと話し合い、スカターグッドのホステル計画は地元のクエーカーや平和主義者に対する戦時中のヒステリーを助長し、憂さ晴らしや八つ当たりの口実となっていると述べた。これに対して反対者は少数派ではあるが、地域の分断をまねきかねないとWRAは見解を示した。また、AFSCが地元の反対を考慮せずにホステル計画を進めると、再定住計画全体を妨げる恐れがあるとも指摘された。こうした経緯から、AFSCも世論の流れに抗して計画を進めるのは得策ではないと考え、スカターグッドにホステルを開くことを断念した²⁴。

スカターグッドのホステル案は頓挫したが、AFSCは1943年4月に監督派教会の建物を借りてオハイオ州シンシナティにホステルを開設した。このホステルでは20人から24人を収容し、シカゴのホステルと同じ料金をとった。また、アイオワ州でAFSCが再定住支援で重要な役割を果たせるという考えは変わらず、デモインにAFSCのオフィスを開設し、9月にホステルを開いた²⁵。

日系人が円滑に再定住できるようにAFSCは他の宗派や組織と連携した。「デトロイト教会評議会 (Detroit Council of Churches)」が日系人再定住者用のホステルを開設した時に、AFSCは1943年12月から半年間毎月50ドルを寄付した。ホステルについて「メソジスト・ユース・フェローシップ (Methodist Youth Fellowship)」から問い合わせを受けたり、各ホステルのディレクターのための会議を開いて方針を話し合ったり、情報を共有したりした。AFSCのスタッフとして働いたトーゴ・タナカによると「シカゴ教会連合は名前や会場場所や自宅を開放してくれる人を見つける手伝いをしたり、住宅を提供してくれたり、やって来た人々に住宅や仕事を得る手伝いをしてくれる組織を利用させてくれた」と述べている。AFSCは他の組織とのネットワークを作って日系人を支援した²⁶。

2-2 ホステルを通しての日系人支援

AFSCのメンバーは各収容所を訪れ、日系人に再定住やホステルについての説明やインタビューを行った。彼らは長期間収容所にいることでアメリカ社会への幻滅や経済的損失、職の確保の困難さなどの弊害を心配し、再定住の重要性を強調した。また、各収容所に日系人のホステル担当者をおき、彼らもホステルについての情報を流したり、申込手続きの業務を行ったりした²⁷。1943年4月にヒラ・リバー収容所 (アリゾナ州) からシカゴに再定住したチャールズ・キクチはシカゴのAFSCからローズが収容所にやって来たことを日記に記している。

ローズさんにフレンド派が良い就職の見通しを持っているのかを尋ねた。ローズさんは立ち退き者のための求人たくさん受けていると言った。多くは1ヶ月で100ドルかそれ以上の給与の秘書の仕事である。(中略) ローズさんはいくつか他の収容所にも行き、それからシカゴに行くようだ。二世たちが滞在する場所があるようにホステルを整えたがっている。ローズさんはシカゴへの再定住に興味がある二世のリストを手に入れるためにここに来た。彼女は最大の問題の1つは住宅であると言った。(日系人が) 集まる傾向があるのかと尋

ねると、1つの地区に日系人の集団がいると目立って、反感を買う可能性が増えるのでそうならないように努力しているが、シカゴでは(その傾向が)起っていると聞いた²⁸。

ホステルについてのパンフレットも作り、ホステルへの申し込み方やホステルが日系人に提供しているサービス、料金などを知らせた。パンフレットの説明によると、日系人はまず収容所所長から出所許可をもらい、AFSCの担当者を通して宿泊申込書ももらって、申し込みをした。受入が認められると出所許可のために必要な正式な案内状がホステルから送られた。荷物や手紙はAFSC気付で送り、収容所の出発日や電車での到着時刻を知らせるように求められた。希望があればホステルの監督者は日系人を駅まで迎えに行った²⁹。

日系人が収容所から出所するときホステルは不可欠な存在となっていた。収容所から出所する際に日系人の多くがアメリカ社会の差別や偏見を最も恐れ、住宅不足や高い家賃を心配していた。ホステルは再定住をためらう日系人と外の社会をつなぐものであった。新しく来た人は「家族の協力的な一員」となり、街についてのオリエンテーションを受け、就職や住居についての「指導」を受けて、ホステルから出て行った。彼らは庭仕事や調理などの雑用を手伝った。仕事や住むところを確保するまで平均で10日ほどホステルに滞在した³⁰。

AFSCはホステルを通して日系人のアメリカ社会への再適応を助けようとした。これは再定住先で受け入れられるように日系人を1カ所に固まらせず拡散させようというWRAの方針に呼応し、AFSCは再定住した日系人に「親善大使」的役割を求めた。シカゴのホステルに滞在したキクチは、AFSCはなるべく二世だけで集まることを思いとどまらせようとしているが、彼らは「馴染みのない都市でお互いを探し求めるので、それは無理だろう」と日記に記している。AFSCのホステルはどれも満室状態で、特にシカゴは日系人が流入してきており、AFSCとプレスレン奉仕団は緊密に連携しあって対応していた。ホステルの回転率は1週間から10日くらいであったが、キクチによるとホステルは「寂しい二世で一杯」であり、「少なくとも2週間に1度」は「卒業生たち」がホステルを訪れており、日系人たちが仲間と会う場所になっていた³¹。

AFSCもホステルは日系人を社会の一員として統合する手助けをしなければならぬとする一方で、日系人たちがくつろげて、帰属感を得られるようにする必要があったと考えていた。滞在している日系人や訪れる人々にホステ

ルを自分たちの「家」だと考えるように求めた。シンシナティでは、ほぼ毎晩のように10数人がホステルを訪れ、おしゃべりをしたり、歌を歌ったり、トランプで遊んだりした。また、「オープン・ハウス」と称して、かつてホステルに滞在していた日系人や日系人の再定住援助に関心のある人にホステルを開放した。さらに、お茶会やピクニックなどを催した。こうした余暇活動の目的は、日系人だけで固まらず、活動を通じて再定住先の白人との親交を促すものであった。しかし、同時にホステルは収容所を出たばかりの人にとって「リハビリの場」であり、ホステルを出た人もAFSCのサービスを求めて時折訪れる場であるという認識をもっていた。シンシナティのホステルでは、シュモーが訪れた際に二世がパーティーを企画し、200人が集まった。ホステルの監督者は白人のAFSCメンバーだったが、秘書や料理人や営繕に日系人を雇うことがあった。日系人スタッフはホステルに「家庭的な雰囲気」を作り出し、親近感を再定住者にいただかせ、英語ができない一世や家族を支援した。ホステルは日系人にとって「コミュニティー・センター」的役割を果たした³²。

AFSCのホステルは収容所から出た日系人にとって助けとなってきたが、シカゴのホステルは1943年12月1日に閉鎖された。ホステルとして使っていた建物の明け渡しを所有者から通告されたからである。AFSCは代替りの建物を探したが、最終的にAFSCとプレスレンのホステルを統合することになった。AFSCのシカゴ・ホステルには303日間で376人が滞在し、そのうち16人がホステルを出た後、もう一度滞在した。184人が男性、171人が女性、21人が子どもだった。344人がホステル滞在中に職を見つけ、残りの32人の中の数人は他の都市に行った。ホステルの滞在平均日数は12.4日で、毎日平均15人が滞在していた。総収入は7138ドル35セント、総支出額は5835ドル69セントで、手元有高は1302ドル66セントだった³³。

シカゴにやって来た日系人の約3分の1がAFSCかプレスレンのホステルを利用しており、彼らの再定住の援助に大きな役割を果たしたとAFSCは評した。再定住した社会に適應できず「収容所に戻ったわずかな収容者の中に、ホステルにいた人は1人もいない」とAFSCのスタッフをしていたタナカは報告している。客をもてなす十分な広さの住居を確保できないため、人々はホステルを古い友人や新しくできた友人に会うための場所と見なしていた。それと同時に、ホステルは人々に住宅状況についての助言を与えたり、新しい社会に適應できるよう導いたりして、実際にホステルに滞在した人々よりも多くの人に影響を与えた³⁴。

3. 東海岸での再定住支援

1943年に再定住した多くが二世の学生を含む独身者か若い夫婦であり、家族や一世の再定住が少なかったことから、1944年になると個人単位だけでなく、家族単位の再定住をWRAが勧めるようになった。また、1943年にはシカゴを中心とする中西部への再定住が多かったことから、日系人を拡散して社会に統合することを方針としていたWRAは他の地域への再定住を勧めることも模索した。1943年後半に収容所を出た人々のうちイリノイ州、オハイオ州、ミシガン州、ウィスコンシン州、インディアナ州の中西部に3759人、山間部州に2160人が再定住したのに対し、ニューヨーク州、ペンシルバニア州、ニュージャージー州の中部大西洋には299人、ニューイングランドには61人と少なかった。プレスレンのホステルを管理していたスメルツァーは、シカゴは日系人流入の「限界点」に達しつつあり、シカゴへの再定住を抑えるべきだという考えを示し、収容所で日系人たちにシカゴ以外への再定住を勧めた³⁵。

東海岸への再定住者数が少なかった理由としては以下のことが挙げられる。東海岸がほとんどの収容所から遠かったことや軍による規制が再定住を妨げていた。東海岸は東部防衛司令部の管轄下であり、再定住が本格化した初期の段階には個人の許可書が必要であり、東海岸の旅行許可書はしばしば遅れがちであった。また、多くの日系人にとって東海岸の都市はなじみのない場所であった。1942年に東海岸に行った人の大半は学生転住による大学入学者だった³⁶。

しかし、徐々に職を求めて東海岸、特に中部大西洋岸の都市に再定住する人々が出てきた。1944年1月にはニューヨーク州は449人だったのが、44年6月には926人、45年1月には1381人となった。ペンシルバニア州は163人から334人、そして45年1月に451人、ニュージャージー州は40人から87人、そして760人と増加した。44年前半で3州合わせて106.6%、後半で92.4%の伸び率であった。一方、シカゴを中心とする中西部は相変わらず多くの再定住者を引きつけており、44年1月で7174人、6月には10403人、45年1月には13922人が居住していた。その伸び率は44年前半で45%、後半で34.5%であった。日系人の拡散や社会への統合を進めようとした人々はシカゴへの日系人の集中を心配し、東海岸への再定住を支持した³⁷。

WRAは東海岸にも現地事務所を開設した。WRAのフィラデルフィア事務所はAFSC本部の向かい側に1943年6月に開設された。フィラデルフィア

事務所の初代の責任者ヘンリー・パターソンはクエーカー教徒であった。フィラデルフィアでも再定住委員会が結成された。パターソンの提案で1943年7月23日に「教会連合 (Federation of Churches)」の人種委員会の会長であるリス・カトラーが最初の会議を呼びかけ、「フィラデルフィア教会連合」のヘンリー・ウィレットを「市民協力委員会 (Citizens Cooperating Committee)」の委員長に選んだ。委員会で最も急を要するものとして住宅問題が取り上げられ、ホステルの開設について議論が行われた。フィラデルフィアに来た日系人を収容する施設を見つけることが緊急の問題だった。AFSCは約30人が滞在できるホステルを開くことに関心を示した³⁸。

しかし、ホステル用の建物候補はいくつか見つかるものの、具体化することができずにいた。日系人はフィラデルフィアになだれ込んできていたが、ホステルの場所が見つからないと計画を進められずにいた。やっと借りられそうな建物を見つけたが、大家がよそへ行ってしまいフィラデルフィアのホステルを「頭痛の種」として本部から各支部に報告し、AFSCではホステルを1943年の冬に開くことができないのではという懸念が生じた。WRAのパターソンはAFSCの会議でホステルの必要性を強調し、AFSCが1944年春にはホステルを開くことを期待した³⁹。

結局AFSCは独自でフィラデルフィアにホステルを開設しないことを決定し、1944年3月に「婦人国際連盟 (Women's International League)」、「教会連合」、「市民協力委員会」がホステル役員会を作り、学生用の下宿屋として使っていた建物を借りて「フレンドシップ・ハウス」という名でホステルを設立した。この役員会には2人の二世も入っており、1944年9月からサム・イシカワによって運営された。ホステル開設を手伝ったサブロウ・イノウエ夫妻は管理人として家庭的で親しみやすい雰囲気を作り出した。元々の寄付金の大きさ、家賃の低さ、回転率の早さのためホステルは財政的に安定していた。1945年12月1日までに約1550人が利用し、収容人数23人のところを平均25人が利用していた。ホステルは再定住計画を遂行し成功させるための「決定的な要因」であり、住居や職探しの際に日系人に安心感を与えた。ホステルの管理者と宿泊者とWRAフィラデルフィア事務所の間に緊密で友好的な協力関係があった⁴⁰。

フィラデルフィアのホステルは中西部のAFSCホステルと同じように「二世とその友人のための社交センター」としての機能も持つようになった。例えば、1944年10月には討論会、1世のためのお茶会、送別会、ハロウィーン・パーティー、トランプゲーム、日曜のお茶会など16の催しが行われ、形式

ばらない集まりはほぼ毎晩開かれた。ホステルの方針は「[ホステル]を二世がやって来て楽しめる「ホーム」にすること」であった⁴¹。AFSCはフィラデルフィアのホステルを開かなかつたが、その運営方法は引き継がれていた。

首都ワシントンで「フレンズ・ミーティング・オブ・ワシントン (Friends Meeting of Washington)」がホステルを作ろうとした際も AFSCは協力した。AFSCは料金や食事の提供、仕事の分担などホステルの運営方法や収容所からホステルへの申し込み手続きについてのなどの情報を提供した。また、資金援助を頼まれた AFSCは毎月 25 ドルを半年間援助する約束をした。1944年 11月にホステルが開業すると、AFSCは各収容所のホステル担当者に情報を流した⁴²。

AFSCは東海岸ではホステルを開かなかつたが、ホステル開業や運営方法について助言を与え、援助をした。各収容所にいるホステル担当者に連絡を取り、ホステルの情報を伝えたり、手続きが変更になった場合を知らせたりした。1944年 6月にシカゴで開かれたホステル管理者の会議では AFSCの日系人委員会の全国事務局長だったロバートソン・フォートがホステルに関する情報の統括責任者となった。この会議では再定住の状況に応じてホステルに関する方針が変わろうと、ホステルの重要性は無くなっていないということで総意が得られた。また、各都市にあるホステルはお互いに協力し、フィラデルフィアのホステルを除いて同じ料金を取ることに出席者は同意した⁴³。

このように AFSCはホステルの有用性やホステルを続けていくことの重要性を認識していたが、その一方でホステルのある都市に日系人が流入しすぎることを懸念していた。AFSCは首都ワシントンでホステルを開く際に「もしある都市で限界点に達したら、ホステルは別のコミュニティに移ってもよいだろう」から、ホステル用の建物を見つけたら 1年単位での賃貸契約にしたほうがよいと助言している。シカゴの AFSCホステルと統合したプレスレンのホステルは、シカゴに日系人再定住者が集中しすぎないようにホステルのプログラムを縮小すべきであるという考えを示した。シカゴよりもニューヨークの方がホステルを必要としているという理由で 1944年 4月にシカゴのプレスレンホステルを閉鎖し、ブルックリンにホステルを開設することにした。ブルックリンのホステルに関心を寄せたニューヨークのフレンド・センターからの問い合わせに対し、協力関係は保つが資金は出せないと AFSCは答えている。また、シカゴでホステルと下宿を兼ねた計画に対しても、既にあるホステルへの協力で手一杯で、資金も限られているという理由で手伝えないと断っている⁴⁴。このように AFSCは日系人がホステルのある都市に

集中することを懸念した。

4. 強制立ち退き令解除後のホステル

1944年にWRAが個人単位だけでなく家族単位の再定住に力を入れ始めると、その方針に従ってAFSCは日系人がシカゴを中心とする中西部に集中しないように東海岸への再定住を支援したが、西海岸への日系人の帰還の可能性を少しずつ意識するようになった。収容所のホステル担当者からの連絡や収容所を何度も訪れていたAFSCのメンバーからの報告で、収容所の外に出たい人たちは既に出所しており、残っている人たちは「1日3食と寝る場所が確保されている方を収容所の外の未知の境遇よりも好み」、「彼らの多くは戦後にカリフォルニアに戻ることをいまだに計画している」ことがわかっていった。ホステル管理者の会議では収容所のこうした傾向が東海岸への再定住の妨げになるという懸念が示された。その一方で、日系人の西海岸へ戻る権利のために計画を立てるべきだが、彼らに戻るように促すべきではないという総意が示された。日系人の職の斡旋にも関わっていたフォートは収容所からの問い合わせに対して、AFSCは日系人が再定住先に選んだ都市がどこであろうと支援するとしながらも、東海岸や中西部の方が西海岸よりも日系人に好意的で身の安全を心配する必要はないと返事をしている⁴⁵。

1944年2月にカリフォルニア州パサデナで西海岸の立ち退き令撤廃を求めて、ウィリアム・カーを中心とする「アメリカ主義友愛会 (Friends of the American Way)」が結成された。結成時からAFSCのローズとニコルソンも参加していた。西海岸帰還を求めて裁判を起こされていた陸軍省は「友愛会」をスポンサーにして二世の少女をパサデナに再定住させる計画を立てた。「友愛会」はその申し出を受け入れ、会員であるヒュー・アンダーソンは1944年9月にパサデナ市立短期大学に入学することとなった日系二世のエスター・タケイの身元引受人となった。日系人の帰還を巡ってパサデナは二分され、アンダーソンは反対派から圧力をかけられたが、屈しなかった⁴⁶。

AFSCは西海岸への帰還の可能性や再定住への影響を検討し始めた。フィラデルフィアにいるフォートはパサデナのローズに西海岸の状況を聞いて聞かせている。ローズは個人的見解として西海岸で声高に日系人の帰還に反対しているのは少数で、大半の人は無関心であること、エスター・タケイのケースがうまくいっていること、既に800人以上の日系人が特別な許可をもらって西海岸に戻っていること、立ち退き令がいつ撤廃されるかはわからないこ

とを知らせている。パサデナ支部とサンフランシスコ支部は、収容所にいる10から20パーセントが西海岸に戻りたがっているが、大量にはなく、少しずつだろうとAFSCの日系アメリカ人再定住委員会にも報告した。また、仕事は多少あるが、ロサンゼルスやサンフランシスコの住宅状況は厳しく、特にサンフランシスコは住宅が全くないので、そのような状況下でホステルを開くことに反対した。パサデナ支部は「最近の発展がどのようなものであっても、日系アメリカ人立ち退き者が一団となって西海岸に戻ってくることはないという事実を強調することが大切である。多くは人種感情が高い地域に戻りたくはないだろう」と述べている⁴⁷。

その一方でパサデナ支部はWRA長官のマイヤーが既にWRAを閉じるメモを準備しており、WRAは予算割当額がもらえない場合は戦争中に日系人を西海岸に帰還させられるよう立ち退き令撤廃を推し進めようとしているという情報を得ていた。「軍事的必要性」のため軍事指定地域からの立ち退きという理屈が通じなくなっており、マイヤーはカリフォルニアへの再定住政策を考え始めていた。この情報を1944年3月に得たパサデナ支部は極秘扱いにし、状況が明らかになるまで議論しないようにした。パサデナ支部のメンバーでもあり、友愛会にも加わっていたローズはこの時点でパサデナにホステル用の建物を探し始め、3つの候補を検討していた⁴⁸。

1944年12月17日の陸軍省が立ち退き令撤廃を発表すると、翌18日にWRAは「プログラムの最終段階に入った」として6カ月から1年以内に収容所を閉鎖することと、出所規定の変更を発表した。1945年1月2日から日系人の西海岸への帰還が可能となった。この時点で収容所には約8万人の日系人が収容されていた⁴⁹。

西海岸では最初にパサデナのホステルが1945年1月15日に開業した。これはローズらが1944年から準備をしていたもので、元日系ユニオン教会の建物で民間公共サービス(Civilian Public Service)に従事していた良心的兵役拒否者用の簡易宿泊所をホステルに変えたものだった。開業当時はAFSCだけでなく、「友愛会」と「フェアプレイ委員会(Fair Play Committee)」のメンバーも運営に関わっていた。宿泊料は1日1ドルで、10歳以下の子どもは50セントだった⁵⁰。

さらに1942年にターミナル島から立ち退きさせられた日系人用のホステルとしてロサンゼルス郡のボイル・ハイツで使っていた建物を再び利用する計画を立てた。フォーサイス・ホステルとして1942年に使用していたこの建物は長老派が所有する建物だったので、同グループの日系人牧師ソーヘイ・

コウタの支援が必要だった。その後、軍が使用したので改装の必要があった。改装費に約1400ドル、家具の購入に500ドルかかった。建物の賃料を払う必要はなかったが、税金と保険料を払わなければならなかった。パサデナのホステルの収容人数が10人から12人程度を想定していたのに対し、エバグリーン・ホステルと名付けられたロサンゼルスのホステルは公式には30人から40人の受け入れを発表したが、ローズたちは50人から55人を収容できるように改装を計画した。宿泊の事前予約が必要だったが、他の宿泊施設が見つからないという理由でホステルの正式開業前から多くの依頼があり、既に40人の滞在者を受け付けていた。滞在者が払う宿泊費は仕事がない人は1日1ドルで、仕事がある人や10日以上滞在を希望する人は1日1ドル50セント、子どもは半額だった。また、ホステルの雑用の分担やシーツやタオルの持参が求められた。エバグリーン・ホステルは3月1日に正式に開業したが、4月30日の時点で435人が宿泊し、そのうち200人が4月中に予約をした⁵¹。

西海岸への日系人の帰還とWRAの収容所閉鎖は、AFSCにとって今後の中西部や東部でホステルの運営方針にも関係する案件だった。1945年1月に建物の賃貸契約の関係で早くもデモイン・ホステルの閉鎖についての議論がなされた。まだこの時点では1945年の再定住計画がどうなるのか明らかでなかったため、フォートは2月にシカゴでホステル管理者会議の開催を呼びかけた。会議では中西部と東部のホステルの管理者や教会組織の代表が集まり、各都市に再定住した日系人の動向を報告した。都市ごとに多少の違いはあったが、全体として再定住した日系人は西海岸への帰還について明確な考えをこの段階では持っていないので、大挙して西に戻ることはないだろうという見解が示された。問題は収容所に残っている人たちがどこに再定住するのかということだったが、WRAの収容所閉鎖について反対意見はなかった。WRAの職員も会議に出席しており、収容所閉鎖に伴い、AFSCをはじめとする民間組織へさらなる再定住支援を要望した⁵²。

AFSCのデモイン・ホステルはWRAと協力しながら、WRAが提供しないサービスを提供するとし、9月までホステルを続けられるように2000ドルを必要としていた。AFSC本部のモリスは6月の会議で後半はホステルへの需要があるとしながらも、8月末で建物の契約が切れたら1カ月単位での更新を提案した。デモイン・ホステルは満室状態だったが、地元の市民委員会の活動が休止状態で、WRAも閉鎖に向けて仕事を縮小していった。フォートは収容所閉鎖には賛成だが、政府は再定住を支援することに「明確な責務」

を感じるべきだと述べている。デモイン・ホステルの管理者ロス・ウィルバーは、WRAが十分な対策もなく日系人を出所させ、西海岸に送っていることに懸念を示し、WRAのシカゴ担当者からデモインに今後多くの日系人が再定住するとは思えないと言われたことなどから、ホステルを閉鎖して資金をAFSCに返すことにした。デモイン・ホステルは10月31日に閉鎖した⁵³。

シンシナティのAFSCホステルを訪れたフォートは、シンシナティはWRAクリーブランド事務所から「継子扱い」を受けていると報告した。日系人たちはシンシナティ社会に適応しているが、地元の市民委員会は「活動を停止しており、無力」であると述べている。1945年1月1日前にシンシナティに再定住した日系人は491人だったが、1945年1月1日以降は125人で7月にAFSCホステルに9人しか滞在しなかった。シンシナティ・フレンズ委員会の提言で1946年1月にホステルは閉鎖された⁵⁴。

1945年秋以降、収容所が次々と閉鎖されるとWRA閉鎖後を見据えた再定住支援のあり方が模索された。収容所の担当者からはシカゴやクリーブランドのような中西部の都市には十分すぎるほどこれからも再定住するだろうが、東海岸へ行こうとする人はあまり多くないことが報告され、フォートも東海岸や中西部の方が日系人にとっては良いのだが、多くの人が西海岸に戻るのには彼らの家や土地などがあるので自然なことであると見解を示した。1945年10月16日に行われた会議ではWRA閉鎖後について話し合いが行われ、AFSCは自分たちの仕事が「必然的に小さくなっていくだろう」と述べた。フィラデルフィアではWRAやAFSCが撤退した後を見据え、YWCAの一部門だった「インタナショナル・インスティテュート (International Institute)」が日系人再定住活動プログラムにより関わっていくことが会議で報告された。WRAが閉鎖するまでは、フィラデルフィアのホステルは運営し続けることを決定した⁵⁵。

このようにAFSCは東海岸や中西部でのホステル運営から少しずつ手を引き始める代わりに西海岸への支援に力を入れ始めた。AFSCは中西部や東部でも住宅探しの支援は続けていたが、西海岸の住宅状況が厳しく、AFSCのホステルだけでなく西海岸のどのホステルも「リトル・トーキョー」状態であり、職探しも容易ではなかった。ホステルは収容所や東海岸や中西部から西海岸に戻ってきた人々の「拠点として活気づいて」いた。エバグリーン・ホステルでは、滞在者が社交室で友人をもてなしたり、大学生のグループや教会関係者が社交的催しや宗教的催しに参加するために訪れたりしていた。東部や中西部のホステルへの再定住の時に必要な手続きが簡略化された

ので、ホステルは西海岸での好意的な世論形成、職や住宅探しに注力した。AFSCは西海岸の状況に注意を払い、再定住支援を行った⁵⁶。

エバグリーン・ホステルは開業当初から満室状態で、平均滞在日数は1週間以下だった。中西部のホステルに比べ滞在日数が少ないのは、ローズによると「1部屋に9人から12人が寝泊まりしているので、フルタイムの仕事を得た人はプライバシーを求めて、率先してどこか他に部屋を探している」と説明している。しかし、政府による住宅探しは成果がなく、出所した人々がホステルに押しかけ、5人の白人スタッフがいるのにベッドが2つある1部屋しかないので、通勤をしなければならず、業務上のロスが大きいと不満を述べている。また、早くに収容所を「出た人は冒険心を持った志願者で、彼らの冒険を助けるために私たちがしていることに大いに感謝した。今や人々は(収容所を)追い出されたと感じており、ホステルは政府のプログラムの一部だとしばしば思い込み、私たちが運営している目的や熱意など気にもかけず、当然のものと考えて」おり、試練の時であると述べた⁵⁷。

こうしたAFSCホステルが抱える負担に対して、AFSC本部から日系人の救済事業は西海岸支部で連携してあたるものではなく、アドバイザー的なものであること、政府との交渉は本部が行うこと、パサデナ支部でかかった運営費は支部の予算内で負担することなどを伝えてきた。パサデナ・ホステルではAFSCは地元の教会グループや日系人の帰還に関わっている組織にプロジェクトを引き渡す準備があるという態度を明らかにすべきだという議論がなされた。AFSCは喜んで支援を続けるが、いつまでもこのプロジェクトを管理し続けるつもりはないことを帰還した日系人に理解してほしいという立場を示した。エバグリーン・ホステルの滞在者数は9月になってさらに増え、一晩に平均120人が滞在し、そのうち20人はスタッフとその家族であった。ホステルを少なくとも冬の間は続ける必要があり、働けない一世のための救済事業がホステル内で押し進められることをAFSCは願っているが、その管理を引き受けるつもりはないことを明言した⁵⁸。中西部や東部のように少人数を受け入れていたホステルとは異なり、収容所の閉鎖が近づくにつれ西海岸に戻ってきた大勢の日系人を受け入れなければならなかった。AFSCホステルだけでは手に負えず、より他の組織との連携や仕事の分担が必要となっていた。

1945年4月にロサンゼルスで開かれたAFSCやWRA、その他教会組織が参加した合同会議では、住宅探しが最も困難な問題の1つとして取り上げられた。そのため、ホステルは住宅探しをしている間に必要な存在だったが、

「ロサンゼルスではほんの約 500 人のためのホステルが必要」で、「大きな単位で集中するよりも、むしろ小さな単位で分散すべき」という見解が示された。中西部や東部で日系人を拡散させるという WRA の方針がここでも再確認された。ホステルとして利用できる建物の多くは、元日系人教会の建物で、西海岸に戻ってきた日系人牧師を「連絡係」としていた。会議では収容者に建物の売り出しや貸し出しの情報の提供を WRA に要望、元日系人教会を一時的なホステルに転用する場合の支援、日系人を含むすべてのグループへの公共住宅のための可能な対策を連邦公共住宅局 (Federal Public Housing Administration 以下 FPHA) に請願などを決議した⁵⁹。

合同会議では WRA が提唱し、AFSC も支持していた日系人の拡散や社会への統合が再確認されたが、住宅状況の厳しさや西海岸への日系人の流入などからこの方針は中西部や東部での再定住ほど遵守されなかった。4月の合同会議では「日系人を白人社会に完全に統合し、二世のいかなる活動も廃止するという理想は、教会を実行不可能で非現実的なプログラムに導くことになる」という見解を二世牧師が述べた。エバグリーン・ホステルでは日系人牧師のソーヘイ・コウタが一世との意思疎通を行い、特に年老いた人々にカウンセリングを行った。また、日本語での礼拝が週 2 回行われ、1945 年 12 月には 40 人以上が日本語礼拝に参加していた。ホステルでは礼拝が行われていたが、宗教に関わりなく宿泊者を受け入れた。また、ロサンゼルスには次々とホステルが作られるようになり、10 月には 22、12 月には 30 近くあり、AFSC はその半数に現金の貸し付け、備品の契約、配管工探し、地域との連絡の手伝い、衛生法や消防法を満たす手伝いなど何らかの援助を行った。さらには仏教の宗派对立で連携出来なさそうな時には仲介者として動く場合もあった⁶⁰。

ローズは WRA が閉鎖するまでは AFSC は再定住支援から手を引くべきではないと述べ、AFSC の日系人再定住委員会です承された。しかし、AFSC のパサデナ・ホステルは 1946 年 1 月 15 日に閉鎖され、建物は日系ユニオン教会に引き渡され、私的な宿泊施設として利用された。6 月 30 日に WRA が閉鎖されると、エバグリーン・ホステルも 7 月 1 日に日系ユニオン教会に引き渡されることとなった。AFSC で再定住支援に関わっていた人々も新しい場所に移っていき、支援が縮小していった。日系人再定住委員会の事務局長フォートはニューヨークに移り、戦争で荒廃したヨーロッパやアジアの国々に物資を送る仕事に就くことになった。ローズは AFSC 日本支部代表およびアジア救済公認団体 (Licensed Agency for Relief in Asia 通称 LARA) の駐日代

表として日本へ渡った。AFSC 日系人再定住委員会を社会産業部門の人種関係委員会に組み込む提案がなされ、日系人再定住委員会は解散した⁶¹。

おわりに

AFSC の再定住支援は立ち退きが行われた西海岸支部を中心に始まり、戦時中 AFSC 全体で取り組んだ。パサデナ支部が発行する *Information Bulletin* の最終号では、WRA 閉鎖後も他の組織との協力の必要性を強調し、ロサンゼルスでのホステル経営を中心に、西海岸に戻った日系人を援助することに力を注ぐことを述べている。そして「立ち退きの遺産」として日系人と公正な心を持つ白人との関係が構築され、日系人についてより広く認知されたことを挙げる一方で、「立ち退きの（補償をしなければならないという）未完の仕事が、危機の際に民主主義の原理を（日系人に）適用しなかったという厳粛な非難をつきつけている」としている。WRA が再定住プログラムを日系人への「より良い理解と将来アメリカのマイノリティ・グループ問題へのより理にかなない、実りあるアプローチに貢献したと信じている」としているのに対し、AFSC は立ち退きを阻止できなかった反省から、次善の策として再定住に関わってきた⁶²。

AFSC は、日系人を収容所から出所させ、再びアメリカ社会に戻すためにホステルは重要な役割を果たすと考えた。AFSC は日系人の円滑な社会への適応には WRA の日系人の拡散や白人社会への統合という方針が最適であると考え、中西部や東部のホステルの受け入れを少人数にした。また AFSC のメンバーはしばしば収容所を訪れて日系人にホステルの情報を流したり、収容所のホステル担当者や情報を共有したりした。AFSC のホステル運営方法は他のホステルを運営する組織に共有され、ホステル運営を通じたネットワークが作られ、AFSC はリーダーシップを取った。そのため、AFSC が軍事指定地域外に作ったホステルは3つだったが、他のホステルのモデルとなり、その運営に影響を及ぼした。

ホステルでは白人との交流を促す催しが行われたが、同時に AFSC のホステルではお茶会などが開かれ、ホステルの元滞在者や再定住先の日系人たちも集まった。そのため、ホステルは日系人にとって「エスニック・コミュニティの情報を提供する社交センター」の役割を果たした⁶³。AFSC は社会的統合を進める場としてのホステルを想定したが、実際には日系人にとっては仲間と会い、社交の場としてホステルは機能した。AFSC や WRA が理想

とした収容所から外の社会への橋渡しの場とは異なったが、ホステルは日系人が外の社会に適応する手助けとして機能した。

日系人の西海岸への帰還が始まると、ここでも AFSC は真っ先にホステルを開設し、日系人の職探しや住宅探しの斡旋をした。収容所閉鎖のために日系人の出所を彼らの拡散や社会への統合よりも WRA が優先するようになると、AFSC もホステルで多くの日系人を受け入れざるを得なくなった。中西部や東部と異なり、少人数の受け入れでは間に合わず、大勢の人を受け入れることになった。そのため、西海岸でも AFSC は他の教会組織や民間組織と連携して、日系人再定住を支援し、他のホステル運営を助けた。また、西海岸においてもホステルは日系人支援に関心のある人々を惹きつけ、日系人に情報交換や社交の場を提供する役割を果たした。1946 年になると AFSC は徐々に日系人支援から手を引き始め、戦後の日本やヨーロッパ復興支援に力を入れ始めたが、政府や他の組織に日系人住宅支援の仕事を少しずつ負担してもらえるようにしていった。1945 年末から 1947 年にかけて WRA と FPHA は住宅不足の一時的解決手段としてトレイラー・パークを運営した⁶⁴。日系人の再定住支援に関する AFSC と WRA をはじめとする政府組織との関係については紙幅の関係上十分に検討することができなかったため別稿で論じたい。

本研究は科研費基盤研究 C (課題番号 21K12439) の助成を受けたものである。

註

- 1 Cheryl Greenberg, “Black and Jewish Responses to Japanese Internment,” *Journal of American Ethnic History*, 14, no. 2 (Winter 1995) : 4; Ellen M. Isenberg, *The First Cry Down Injustice? : Western Jews and Japanese Removal during WWII* (Lanham, MD: Lexington Books, 2008), xii-xiii.
- 2 Sandra C. Taylor, “‘Fellow-Feelers with the Afflicted’: The Christian Churches and the Relocation of Japanese During World War II.” In *Japanese Americans from Relocation to Redress*, edited by Roger Daniels, et al. (Salt Lake City, UT: University of Utah Press, 1986), 123-129.
- 3 Allan W. Austin, *Quaker Brotherhood: Interracial Activism and the American Friends Service Committee, 1917-1950* (Urbana, IL: University of Illinois Press, 2012), 113; Anne M. Blankenship, *Christianity, Social Justice, and the Japanese American Incarceration during World War II* (Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press, 2016), 4.
- 4 Gary Y. Okihiro, *Storied Lives: Japanese American Students and World War II* (Seattle: University of Washington Press, 1999); Allan W. Austin, *From Concentration Camp to Campus: Japanese American*

- Students and World War II* (Urbana, IL: University of Illinois Press, 2004).
- 5 Blankenship, *Christianity*, 18-19; Audrie Girdner and Anne Loftis, *The Great Betrayal: The Evacuation of the Japanese-American during World War II* (London: Macmillan Co., 1969), 25.
 - 6 Blankenship, *Christianity*, 49; Shizue Siegel, *In Good Conscience: Supporting Japanese American During the Internment*, (San Mateo, CA: Asian American Curriculum Project, 2006), 27.
 - 7 Letter from Esther B. Rhoads, March 3, 1942, Pasadena Branch Office-Correspondence from/to Esther Rhoads, Social Industrial Section, Japanese American Relocation (hereafter SIS-JAR), 1942, AFSC Archives, Philadelphia (hereafter AFSC); Walter Balderston, "Forsythe Hostel," Pasadena Branch Office-Report, SIS-JAR, 1942, AFSC. ローズの3月3日の手紙は同じものがハバフォード大学にも所蔵されている。Esther B. Rhoads Papers, Box 19, folder 2b, Quaker Collection, Haverford College (hereafter HC).
 - 8 Rhoads to Cary, March 9, 1942, Pasadena Branch Office-Correspondence from/to Esther Rhoads, SIS-JAR, 1942, AFSC; Balderston, "Forsythe Hostel," Pasadena Branch Office-General, SIS-JAR, 1942; AFSC Southern California Branch, *Information Bulletin*, March 15, 1942, April 1, 1942.
 - 9 Balderston, "Forsythe Hostel."
 - 10 Ibid.; Rhoads, April 13, 1942, June 19, 1942, Pasadena Branch Office-Correspondence from/to Esther Rhoads, SIS-JAR, 1942, AFSC.
 - 11 当時、西海岸にはパサデナ、サンフランシスコ、シアトル支部があった。
 - 12 *Information Bulletin*, March 15, 1942, May 18, 1942; Floyd Shomoe, "Seattle's Peace Churches and Relocation," In *Japanese Americans from Relocation to Redress*, edited by Roger Daniels, et. al. (Salt Lake City, UT: University of Utah Press, 1986), 118; Tsukasa Sugimura, *Quiet Heroes: A Century of American Quakers' Love and Help for the Japanese and Japanese-Americans* (Sydney: International Productions, 2014), 2.
 - 13 Aydelotte to Cary, April 3, 1942, Administration, General, SIS-JAR, 1942, AFSC; Minutes of the Social Industrial Section, April 23, 1942, AFSC Minutes, AFSC; Homer L. and Edna Morris, "Memorandum on Problems Caused by Evacuation Orders Affecting Japanese and Problems of Organization of American Friends Service Committee Work on the Pacific Coast," Pasadena Branch Office-Report, SIS-JAR, 1942, AFSC.
 - 14 War Relocation Authority, *Administrative Highlights of the WRA Program* (Washington D.C.: U.S. Government Printing Office, 1946; reprint. New York: AMS Press, 1975), 1; War Relocation Authority, *Second Quarterly Report*, July 1 to September 30, 1942, 17; Austin, *Quaker Brotherhood*, 130; War Relocation Authority, *The Relocation Program*, (Washington D.C.: U.S. Government Printing Office, 1946; reprint. New York: AMS Press, 1975), 15-17; Amy Hayashi, "Japanese American Resettlement: The Midwest and the Middle Atlantic States, 1942-1949," (Ph. D. dissertation, Temple University, 2004),

109.

- 15 Advisory Committee on Planning for Evacuees in Chicago Organization Meeting, July 28, 1942, Chicago Branch Office, SIS-JAR, 1942, AFSC; Toru Matsumoto, *Beyond Prejudice: A Story of the Church and Japanese Americans* (New York: Friendship Press, 1946; reprinted New York: Arno Press, 1978), 55-56.
- 16 Advisory Committee for Evacuees Minutes of the Meeting, October 29, 1942, Morris to Brown, October 30, 1942, Chicago Branch Office, SIS-JAR, 1942, AFSC; War Relocation Authority, *The Relocation Program*, 18.
- 17 Minutes of Japanese Relocation Committee, January 29, 1943, AFSC Minutes, AFSC; War Relocation Authority, *The Relocation Program*, 21.
- 18 Tom Sugimura, *The Church Behind Barbed Wire: Stories of Faith during the Japanese American Internment of World War II*, (Tom Sugimura, 2022), 201-202; Minutes of the Board of Directors, January 6, 1943, AFSC; Morris to Morgenroth, January 7, 1943, Chicago Branch Office-Correspondence, SIS-JAR, 1943, AFSC; Morris to Booth, et al. January 19, 1943, Staff Correspondence, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 19 Morris to Morgenroth, January 7, 1943, January 8, 1943, Chicago Branch Office-Correspondence, SIS-JAR, 1943, AFSC; Morris to Booth, et al. January 19, 1943, Staff Correspondence, SIS-JAR, 1943, AFSC; Brown to Morris, January 23, 1943, Chicago Branch Office-Correspondence, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 20 Rhoads to Morris, January 21, 1943, Chicago Branch Office-Correspondence, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 21 “AFSC Japanese Relocation Hostels Instructions Regarding Use of Daily Accounting Memo,” Relocation Hostel-General, SIS-JAR, 1943, AFSC; Morgenroth to Morris, February 18, 1943, Chicago Branch Office-Correspondence, SIS-JAR, 1943, AFSC; Minutes of Japanese American Relocation Committee, February 25, 1943, AFSC; Blankenship, *Social Justice*, 182.
- 22 Newlin to Morris, January 25, 1943, Morris to Newlin, January 29, 1943, Des Moines Relocation Hostel-General, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 23 Copithorne to Rogers, February 12, 1943, Morris to Newlin, February 15, 1943, Copithorne to Morris, February 25, 1943, Des Moines Relocation Hostel-General, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 24 Morris to Copithorne, et al., February 26, 1943, Copithorne to Morris, February 28, 1943, Copithorne to Morris, “Private and Confidential,” February 28, 1943, Morris to Copithorne, et al., March 4, 1943, Relocation Hostels- Des Moines, General, SIS-JAR, 1943, AFSC; Morris to Craver, March 19, 1943, Scattergood Relocation Hostel, 1943, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 25 Morris to Balderston, et al., April 28, 1943, Cincinnati Relocation Hostel, 1943, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 26 Morris to Brumbaugh, November 22, 1943, Detroit Relocation Hostels, SIS-JAR, 1943, AFSC; Minutes of Japanese Relocation Committee, September 28, 1943; Bremer to Copithorne, January 27, 1944, Relocation Hostels – General, SIS-JAR 1944, AFSC; Japanese American National Museum, et al. eds. *Regenerations Oral History Project: Rebuilding Japanese American Families, Communities, and Civil*

- Rights in Resettlement Era*, (Japanese American National Museum, 2000), vol. 2, 436-437.
- 27 Minutes of Social Industrial Section, April 8, 1943, AFSC. ホステル担当の日系人が再定住すると後任をどうするかという問題があった。
- 28 Charles Kikuchi, "Diary," March 14, 1943, 2260, Japanese American Evacuation and Resettlement Studies: A Digital Archive, Bancroft Library, University of California, Berkeley, (以下 JAERDA) Accessed 4 September, 2021, <https://oac.cdlib.org/ark:/28722/bk00133575t/?brand=oac4>.
- 29 "Relocation Hostel," American Baptist Home Mission Society, American Friends Service Committee, and Brethren Service Committee, "How to Relocate Through a Hostel," Chicago Branch Office, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 30 Matsumoto, *Beyond Prejudice*, 72; Blankenship, *Christianity*, 182.
- 31 Austin, *Quaker Brotherhood*, 132-133; Kikuchi, "Diary," April 16, 1943, 2525; April 17, 1943, 2526; June 6, 1943, 2703, JAERDA.
- 32 Iowa Committees of the American Friends Service Committee Meeting, June 27, 1943, Des Moines Relocation Hostels-Minutes; AFSC Hostel to Morris, May 11, 1943, Brinton, June 25, 1943, "11th Week Report," July 10, 1943, "Report of Week of August 29 and September 5," September 12, 1943, "Report of the All the Weeks and Weeks since September 11," October 16, 1943, Cincinnati Relocation Hostel, SIS-JAR, 1943, AFSC; Hayashi, "Japanese American Resettlement," 146; Austin, *Quaker Brotherhood*, 138. プレスレンホステルを管理していたスメルツァーは、日系人の集まりを控えるようにしていた。 Kikuchi, "Diary," November 1, 1943, 3604, Accessed August 30, 2023, https://digitalassets.lib.berkeley.edu/jarda/ucb/text/cubanc6714_b305w01_0080_22.pdf
- 33 Fort to Morris, August 6, 1943, August 14, 1943, Fort to Akard, December 17, 1943, Relocation Hostels-Chicago, SIS-JAR, 1943, AFSC; "General Statistical Information," n.d., Chicago Branch Office-General, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 34 "General Comments," n.d., Chicago Branch Office-General, SIS-JAR, 1943, AFSC; *Information Bulletin*, July 1, 1943.
- 35 War Relocation Authority, "Semi-Annual Report," July-Dec., 1943, 36-37; Ralph Smeltzer, "Present Conditions, Trends, and Problems Concerning the Brethren Hostel and the Relocation Program," January 21, 1944, Smeltzer to Brethren Service Committee, et al. Marh 28, 1944, Relocation Hostels-Chicago, SIS-JAR, 1944, AFSC.
- 36 Hayashi, "Japanese American Resettlement," 174-175.
- 37 War Relocation Authority, "Semi-Annual Report," Jan.-Jun., 1944, 11-12, Jul.-Dec., 58; Hayashi, "Japanese American Resettlement," 176.
- 38 Philadelphia District Office, War Relocation Authority. "Final Report," 127, JAERDA. Accessed 9

- February, 2022. <https://oac.cdlib.org/ark:/13030/k600094x/?brand=oac4> ; Willet to the Members of the Citizens Cooperating Committee, August 26, 1943, Mary S. Patterson, “Citizens Cooperating Committee for Resettlement of Japanese Americans,” August 14, 1943, Committees and Organizations - Citizens Cooperating Committee for Resettlement of Japanese Americans, SIS-JAR, 1943, AFSC.
- 39 Joans to Rhoads, et al., October 19, 1943, Joans to Rhoads, et al. November 24, 1943, Staff Correspondence, SIS-JAR, 1943, AFSC; Minutes of Japanese American Relocation Committee, December 28, 1943, AFSC.
- 40 Philadelphia District Office, War Relocation Authority, “Final Report,” 117-119, 129; Willet to Jones, March 2, 1944, Relocation Hostels – New York, SIS-JAR, 1944, AFSC. WRA の報告書ではフィラデルフィアのホステル運営が順調だったように記されているが、1944年の夏にはホステル管理者ビクター・ゴーツェルとWRAとの間に摩擦が生じ、WRAはAFSCに取りなしを求めた。また、ゴーツェルとイノウエ夫妻の間にも摩擦があった。ゴーツェルは辞任し、YMCAのサム・イシカワが後任として仕事を引き継いだ。Fort to Morris, August 30, 1944, September 19, 1944, Relocation Hostels – Reports, SIS-JAR, 1944, AFSC.
- 41 Samuel Ishikawa, “Philadelphia Hostel Report, October 1944,” November 4, 1944, Relocation Hostels-Philadelphia, SIS-JAR, 1944, AFSC.
- 42 Allen to Fort, April 18, 1944, Fort to Allen, April 28, 1944, Fort to Allen, August 11, 1944, Allen to Fort, August 21, 1944, Fort to Allen, August 25, 1944, Fort to Fujimura, et al. November 6, 1944, Relocation Hostels – Washington D. C., SIS-JAR, 1944, AFSC.
- 43 Fort to Ohno, July 19, 1943, Correspondence from / to Robertson Fort, 1944, SIS-JAR, 1944, AFSC; “Minutes Hostel Directors Meeting,” June 7, June 8, 1944, Relocation Hostels – General, 1944, SIS-JAR, 1944, AFSC. 同じ時期にフォートはフィラデルフィアの再定住者の住宅探しの仕事を引き受けた。フォートは1944年6月から1946年1月までに住宅援助の依頼を982件扱ったと報告している。Philadelphia District Office, “Final Report,” 120.
- 44 Fort to Allen, June 15, 1944, Relocation Hostels – Washington D. C., 1944; Smeltzer, “Present Condition,” January 21, 1944, Zigler to Morris, April 7, 1944, Relocation Hostels – Chicago; Middleton to Fort, June 22, 1944, Fort to Middleton, June 29, 1944, Correspondence from/to Robertson Fort; Fort to Kubose, September 8, 1944, Relocation Hostels – General, SIS-JAR, 1944, AFSC. ニューヨークのブルックリン・ホステルは当時のニューヨーク市長フィオレロ・ラガーディアなどから設立を反対されたが、多くの教会が対抗の決議を出し、1944年5月に開業した。Matsumoto, *Beyond Prejudice*, 73-87; 吉田亮「第二次大戦期アメリカプロテスタントの日系人「社会統合」活動—ニューヨーク日系アメリカ人教会委員会による日系人再定住支援活動」『教育文化』27号、2018年、18-19.
- 45 “Report on Visit Made by John W. Copithorne to the Gila, Poston, and Granada Relocation Center, May 1943,” Relocation Hostels—Des Moines- General, SIS-JAR, 1943, AFSC; “Minutes Hostel Directors

- Meeting,” June 8, 1944, Relocation Hostels – General, SIS-JAR, 1944, AFSC; Fort to Murata, September 29, 1944, Correspondence from /to Robertson Fort, SIS-JAR, 1944, AFSC.
- 46 島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』（リーベル出版、1995年）、107-108, 111-114.
- 47 Rhoads to Fort, November 7, 1944, Pasadena Branch Office - Correspondence from/to Esther Rhoads, SIS-JAR, 1944, AFSC; Minutes of Japanese American Relocation Committee, November 21, 1944, AFSC Minutes, AFSC; *Information Bulletin*, November 10, 1944.
- 48 Henley to Morris, March 3, 1944, Pasadena Branch Office -General, SIS-JAR, 1944, AFSC; Rhoads to Morris, March 27, 1944, Pasadena Branch Office-Correspondence from/to Rhoads, SIS-JAR, 1944, AFSC.
- 49 War Relocation Authority, “Semi-Annual Report,” Jan. 1 to Jun. 30, 1945, 1.
- 50 “Announcement of Pasadena Hostel,” n.d.; “Report on Progress of Southern California Hostels,” January 31, 1945, Pasadena Branch Office -General, 1945, SIS-JAR, 1945, AFSC.
- 51 Rhoads to Sharpless, January 19, 1945, Rhoads Papers, Box 19, HC; “Announcement of Evergreen Hostel,” n.d.; “Evergreen Hostel Report No. 2,” March 12, 1945; “Evergreen Hostel April 1945,” n.d., Relocation Hostels – Los Angeles, 1945, SIS-JAR, 1945, AFSC. 建物の保険料をめぐって AFSC パサデナ支部と長老派がもめ、ローズは AFSC から保険料を払ってもらった。Rhoads to Morris, April 2, 1945, Morris to Rhoads, April 10, 1945, Relocation Hostels – Los Angeles, SIS-JAR, 1945, AFSC.
- 52 Minutes of Japanese American Relocation Committee, January 4, 1945, February 21, 1945, AFSC Minutes, AFSC; Fort to Wieland, January 9, 1945, Fort, “Chicago Resettlement Meeting,” February 5-6, 1945, Conference-Chicago Resettlement Meeting, SIS-JAR, 1945, AFSC.
- 53 Newlin to Friends, March 1945, Minutes of the Iowa Committee of AFSC, June 16, 1945, Relocation Hostels– Des Moines-General, SIS-JAR, 1945, AFSC; Minutes of Japanese American Relocation Committee, August 22, 1945, AFSC Minutes, AFSC; Wilbur to Fort, September 3, 1945, October 3, 1945, Relocation Hostels-Des Moines-Correspondence, SIS-JAR, 1945, AFSC.
- 54 Fort to Friends, August 24, 1945, Staff Correspondence, SIS-JAR, 1945, AFSC; Minutes of Japanese American Relocation Committee, August 22, December 13, 1945, AFSC Minutes, AFSC; United States of the Interior, *The Evacuated People: A Quantitative Description* (Washington D.C.: U.S. Government Printing Office, 1946, rpt. New York: AMS Press, 1975), 44.
- 55 Fuso to Fort, February 14, 1945, Fort to Fuso, February 26, 1945, Relocation Hostels -Rivers, SIS-JAR, 1945, AFSC; Philadelphia District Office, War Relocation Authority. “Final Report,” 135; Minutes of Japanese American Relocation Committee, November 20, 1945, AFSC Minutes, AFSC; Philadelphia Hostel Board Meeting, October 9, 1945, Relocation Hostels-Philadelphia, SIS-JAR, 1945, AFSC. フィラデルフィアホステルはサブローとミチヨ・イノウエが監督者となり、再定住者用ホステルの中では最も長く運営され、1974年に閉鎖された。
- 56 Minutes of Japanese American Relocation Committee, November 20, 1945, AFSC Minutes, AFSC;

- “Evergreen Hostel,” n.d. Rhoads Paper, Box 21, HC.; Jeffrey C. Copeland, “Stay for a Dollar for a Day: California’s Church Hostels and Support during Japanese American Eviction and Resettlement, 1942-1947,” (M.A. Thesis, University of Nevada, Reno, 2014), 84-85.
- 57 Rhoads to Morris, May 8, 1945, Rhoads to Friends Mission Board, August 29, 1945, Pasadena Branch Office -Correspondence from / to Rhoads, SIS-JAR, 1945, AFSC.
- 58 Waring to Rhoads, September 11, 1945, Pasadena Branch Office -Correspondence from / to Rhoads, SIS-JAR, 1945, AFSC; Minutes of Committee on Pasadena Hostel, September 6, 1945, Pasadena Branch Office – General; Minutes of Evergreen Hostel Committee, September 12, 1945, Relocation Hostels – Los Angeles, SIS-JAR, 1945, AFSC.
- 59 “Joint Conference of Japanese Church Work, Resettlement and Return,” April 24-26, 1945, 4, 12-13, JAERDA. Accessed September 22, 2023.
<https://oac.cdlib.org/ark:/13030/k65b09j9/?brand=oac4>
- 60 Ibid., 9; Rhoads to Fort, October 5, 1945, Rhoads to Mission Board of the Religious Society of Friends, December 6, 1945, Pasadena Branch Office -Correspondence from / to Rhoads, SIS-JAR, 1945, AFSC.
 AFSCやプロテスタント教会の多くは仏教徒も支援したが、仏教徒のなかには礼拝への参加を求められるのではないかと心配する者もいた。しかし、AFSCホステルでは礼拝への参加を求めていなかった。Blankenship, *Christianity*, 95-96.
- 61 Minutes of Japanese American Relocation Committee, January 2, 1946, AFSC Minutes, AFSC; *Information Bulletin*, February 20, 1946; AFSC Southern California Branch, *News Bulletin*, May 22, 1946; 郷戸夏子「エスター・B・ローズと日本—戦前、戦中、戦後の活動を通して」『国際基督教大学学報 3-A アジア研究別冊』21号、2016年、45.
- 62 *Information Bulletin*, February 20, 1946; WRA, “Semi-Annual Report,” Jan.-June, 1946, 27.
- 63 Austin, *Quaker Brotherhood*, 138.
- 64 U.S. Department of the Interior, *People in Motion* (Washington D.C.: U.S. Government Printing Office, 1947, rpt. New York: AMS Press, 1975), 183-184.